

エチオピアの「コーヒーの森」

1. 地域の概況

エチオピアの首都アディスアベバから南西に約 350 キロメートルの場所に位置するゴンマ地方一帯は、なだらかな丘陵地が広がり、その斜面にはコーヒーが植えられた森が広がっている。この地域は年間に 1300mm から 1600mm ほどの降水量があり、エチオピアの中でも比較的、雨の多い地域である。

この地域の農民のほとんどがコーヒー栽培に生計を依存している。同時に、トウモロコシ栽培を行うことで自給用の食糧を確保している。



図 エチオピア・ゴンマ地方

2. 「コーヒーの森」の成り立ち

ゴンマ地区の北部に位置するコンバ村(人口 451 人、世帯数 451 世帯、1994 年)で調査をした松村[2005]によると、この地域の住民は乾季のあいだにコーヒーの採取を行い、乾季の終わりから雨季の終わりまでトウモロコシの栽培に従事する。住民は 9 月から 2 月の内の 2、3 月ほどのあいだにコーヒーの摘み取りをおこなって現金収入を得て、次の当森こしの収穫期(10 月～11 月)までそれで何とかしのぐ。

この辺りでは、丘陵地に集落やコーヒー林がひろがり、そこから低湿地との境界部分にかけてトウモロコシ畑が作られた景観が広がる(写真)。コーヒーは日の光に直接さらされると葉を黄色くして、とたんに実りが悪くなる。そのため、コーヒーは、気候の急激な変動や過度の乾燥と降雨からまもり、安定した生産量を保つ役割を庇陰樹と一緒に育てられる。



写真 トウモロコシ畑とコーヒーの森が広がる
コンバ村の景観
出典：松村[2005:226]

コーヒーが栽培されている地域には決まって樹高が 5、6 メートルから 15 メートルほどの庇陰樹が生い茂っており、森を形作っている。

以上述べた、コーヒーと庇陰樹からなる「コーヒーの森」は、次の二つの方法で造成される。一つは、畑地などに積極的に庇陰樹とコーヒーを植えてゆく方法である。この方法では例えば、モロコシやシコクビエを播種し、それが腰の高さほどまでに育った時に、そこに庇陰樹となるコーヒーの木を植える。この場合、庇陰樹には、高級家具用材として取引されるコルディア(*Cordia africana*)やクロトン(*Croton macrostachynus*)などが選ばれる。

もう一つは、自然の植生を利用する場合である。たとえば、放牧帰りの牛が草を食むような開けた土地であれば、牛が入らないようトゲのあるアカシアの枝などで簡単な柵を作

り、自然に樹木が生えてくるのを待つ。そして刈らずに自生した樹木を育てる。その後、木が人の背丈ほどに育ったところで、コーヒーの苗を植えてゆく。この過程で、時に庇陰樹として適さない樹木が刈られ、薪や炭、建材として適したものが残されることがある。しかし、粗放管理のゆえに、結果的には植物の高い多様性が保たれた「コーヒーの森」となる。

3. 多様な資源を供給する有用性の高い森

このように「コーヒーの森」が作られてゆく過程で、緩やかな人為的選択がはたらくことで、「コーヒーの森」は薪や炭、建材などに利用される樹木が半栽培された有用性の高い森となる。特に、薪については、「コーヒーの森」が恒常的に採取可能なほとんど唯一の場となっている。

薪や炭、建材となる樹木の他にも、「コーヒーの森」には、ヤマゴボウ(*Phytolacca dodecandra*)やキツネノマゴ(*Justicia schimperiana*)などさまざまな薬用植物も生えている。

このように、「コーヒーの森」は単にコーヒーを栽培する場というだけではなく、人びとに多様な資源を供給する有用性の高い森になっている。

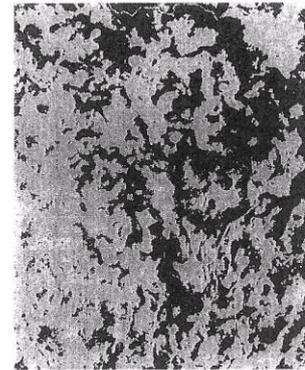
4. 森の拡大

コンバ村でコーヒーの栽培が行われるようになったのは、1940年代からであり、それが本格化するのは1950年代から1960年代にかけてである。

松村[2005]によると、「コーヒーの森」は少なくとも、1950年代以降、主にもともと畑だった場所を中心に増えてきている。1989年と1998年の二時期における衛星画像の分析によると、森林率はその約10年間に44%から51%に増加している。それは地域の人びとが「コーヒーの森」を造成した結果だという。

著しい森林減少が問題視され、また高地では土壌流出が深刻な問題となっているエチオピアにあって、森を作り、森の存在を前提にした人びとの営みは、注目に値するといえよう。今後、「コーヒーの森」が地域の生物多様性にどのような影響を与えているのかを明らかにする詳細な研究が求められる。

a : 1989年



b : 1998年

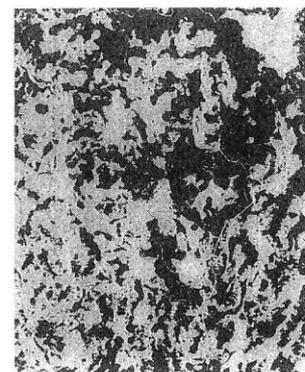


図 コンバ村の森林被覆
出典：松村[2005:233]

出典：松村圭一郎．2005．「社会空間としての『コーヒーの森』—ゴンマ地方における植林地の拡大過程から」 福井勝義(編)『社会化される生態資源—エチオピア 絶え間なき再生』京都大学学術出版会, pp. 219-255.